

— 鉄 鋼 ニ ュ ー ス —

32年度の鉄鉱石輸入計画

製鉄各社でまとめた32年度の鉄鉱石輸入計画によると、輸入量は約890万tで、前年度より90万t多く、輸入先はマレー、フィリピン、インドなど東南アジア諸国が大部分を占めている。また32年度の輸入鉄石の消費量は824万tなので、差引き66万tが在庫の増加に向けられ、明年3月末の輸入鉄石の在庫は約250万tと3.5か月分位に達する筈である。

輸入先別の数量と問題点は次の通り。

マレー：275万tと全体の3割以上を占めており、特にズンゲン鉄石は鉄分60%で品位も高く、入荷の促進が必要だという。

フィリピン：全部で190万t、このうち120万tがラップの鉄石だが、4月から操業する筈の選鉱設備が7月に延びたため予定通り入るかどうかが懸念されている。残りはマナー鉄山の鉄石が主だが、これは本年度が最初の買付けである。

ゴア：140万tで、このうち50万tはシリガオ鉄山のものだが、同鉄山はさきに暴動が起つて設備が破壊されたので、輸入量が半減される恐れが濃い。

インド：昨年秋にインド国営貿易会社と長期購入契約を結んだので、その第1年度分として130万tを予定しているが、インド内の貨車不足のため入荷は1割位減るかも知れない。しかし長期契約を結ぶ前の契約残が約15万tあるので埋合せはできるものと見られる。

その他：米国、カナダから計92万tのほか香港12万t、ブラジル12万t、韓国8万t、その他31万tとなっている。

昨年米国鉄屑輸出

米国商務省および米国鉄鋼協会では1956年の年間国別鉄屑輸出実績をまとめたが、これによると、対日輸出量は合計2,010,792ネット・トン（1ネット・トンは907kg以下n・tと記す）で、前年実績の715,825n・tにくらべて約3倍の多きに達しており、国別最高となっている。

1956年における鉄屑輸出合計は5,866,707n・tで、前年の4,992,332n・tにくらべ約1,000,000n・tの増加となっているが、これを相手国別に見ると、日本に対する輸出量の増大が目立っている。これが先頃とられた鉄屑輸出制限措置の原因となつたものである。以下イタリア、カナダ、英国、フランス・ザール、メキシコ、ベルギー・ルクセンブルク、西独の順となつているが、主要国別内訳は次の通り。（単位n・t）

日 本	2,010,792	イタリヤ	1,254,070
カ ナ ダ	688,520	英 国	563,511
フランス・ザール	337,902	メキシコ	325,157
ベルギー・ルクセンブルク	256,535	西 独	238,776
台 湾	43,376	スペイン	40,987
オ ラ ン ダ	35,057	オーストリア	19,752

なおこれはブリキ、ターン・プレート、軌条および車軸が含まれている。

ミナス製鉄所の建設計画

ブラジル、ミナス製鉄所建設協力の日本側関係者は、かねて経団連ミナス製鉄所建設協力委員会を中心に、協力促進のための交渉団派遣、建設協力計画書の作成を急いでいたが、このほど堀越禎三氏（経団連常任理事）を団長とする交渉団の人選を終え、年間鋼塊50万t、鉄鋼製品35万tの生産に必要な日本側の建設計画を携えて度伯することになった。

日本側の建設計画は次の通りである。

高炉：日産700t2基、製鋼：日産45t上吹き転炉2基。分塊設備：巾66~68インチ1基、厚板：120インチ厚板設備2基、ホット・ストリップミル：巾72インチ4段1基、コールド・ストップミル巾56インチ1基、その他コークス設備、化成設備。

などで、これら資金は520億円となるが、うち300億円程度を日本から協力する。完成は6年を計画し、第1高炉の完成は3年目の終りから4年目にかけて、厚板は4年目から開始する。

電気炉の設備新改造計画

特殊鋼部門の設備合理化計画は、普通鋼部門にくらべ遅れていたが、最近ようやく積極的な設備合理化計画が旺盛となつた。合理化の第1段階は電気炉の増設であり続いて圧延設備の合理化の順となるが、特殊製鉄協会の調べによると、32年度電気炉の設備新改造計画は、新設21基、改造4基、計231,264tに達している。

30年度の電気鉄生産実績が141,000t、31年度計画が21万tであつたのに比べるとその増大ぶりは驚異的なものといふことができる。このため32年度自社案生産計画は合計383,233tに達している。とくに注目されるのは電気炉が大型化されており、30t電気炉も計画されておることである。

これら電気鉄各社の電気炉新改造計画の内訳を地区別にみると、東北114,144t、東京48,000t、中部17,800t、北陸51,840tで八戸を中心とした東北地区に集中された感じであり、設備競争の激化が予想されている。

八幡製鉄酸素発生機を新設

八幡製鉄所では、所内に建設中の上吹転炉2基（日産各50t）に必要な酸素を確保するため、総工費5億円で酸素工場の新設工事を進めている。発生機のうち主要設備の分離装置は、ドイツのリンデ・フレンゲル社から輸入、4月中旬から据付けをはじめ、6月中に完成の予定であるが酸素発生力は毎時4250m³でわが国最大（従来最高能力は毎時2000m³）という大規模のものである。なお（1）酸素分離に必要な気圧は4.9気圧と既設のものに比べ1/4以下ですむ。（2）99.6%の高純度酸素が得られ、特に窒素分は完全に除くことができるなどの特徴をもつているという。